

PRO-LIFE

news

記事

毎日新聞二月二十五日

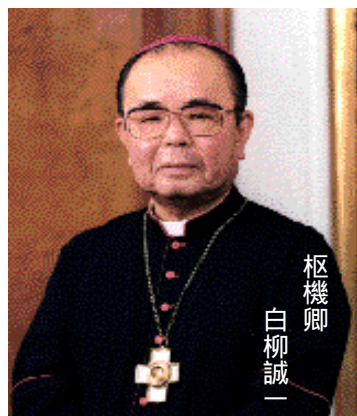
障害胎児の中絶認める

「不治で致命的」を条件に

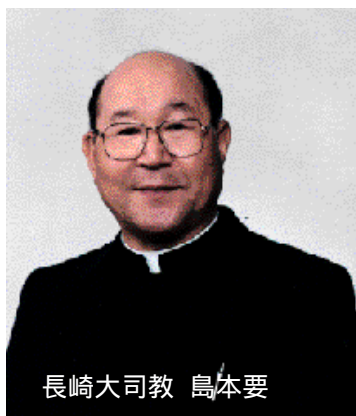
日本母性保護
産婦人科医会

重大な問題

春の訪れとともに、私たちは主の復活を祝い、記念する最も充実した時を迎えています。
主の受難と復活の典礼は、私たちに生命と死、救いと罪について深く黙想する機会を与えてくれま



枢機卿
白柳誠一



長崎大司教 島本要

母体保護法の改正 要望についての苦言

日本母性保護産婦人科医会は、三月三十日代議員会で「母体保護法」改正案をまとめ、国に提出しようとしている。改正の内容は、現行

す。全ての生きとし生けるものが甦ると言われるこの時、私たちは神によって創られ、御ひとりごがその尊い命を捧げてくださったほど、神に愛され、贖われた私たち人間の生命の永遠の尊さに思いを寄せないではおられません。

最近、世界はクローンの羊や猿の姿をテレビ通して見ることになり、更にクローンの人間さえも技術的には可能であるという科学者たちの発表を聞き、驚かされるとともに、生命に関する技術がどんどん独り歩きしていくなかで、その倫理がまったく育てられていない事実をつきつけられています。
「不治で致命的な障害をもつと判断された胎児の中絶を認めよ」と

の母体保護法が認めている人工中絶の条件に加えて、胎児に不治で致命的と認められる障害、疾患がある場合や、妊娠第十二週未満は理由を問わず中絶できるようにする条項を盛り込むことである。

このような発想は人間の命の神聖さと不可侵性を完全に無視した人間否定の発想であって、絶対に許されてはならない。人間のいのちは、教皇庁科学アカデミーの極く最近の声明を待つまでもなく、受精の瞬間から始まり、その新しい命は母親の身体の一部ではなくな、独立した一人格である。したがって胎児のいのちに対するあらゆる侵害は、まぎれもない殺人行

いう記事が新聞に大きな活字で紹介された時、私たちは更に身近な問題として、おどろきというよりは、大変深刻な悲しみと心を揺るがす怒りを感じました。

全く当然のことながら、障害者の方々からは、傷害者の人権に対する考えられないような発想とか、SF的な恐怖を感じるといった生々しい、率直な抗議の声が表明されました。母体保護法という隠れみのの裏に、傷害をもつ赤ちゃんを母体のなかで殺してしまうという発想は単に赤ちゃんの生命の問題だけではなく、また、障害者の人権にも関わる問題であり、更に人間をあたかも物と考えて、外面的に役にたつものはとり、「2ページへ

為であって、当然、法に則った処罰の対象であるべきである。人間のいのちについて、生殺与奪の権限は誰にもない。

また、この発想は障害者に対するゆるし難い差別である。障害をもつ胎児は生まれてきてはならないと言っ障害者廃絶の思想だからである。障害者と健全者が共存する世界、これが正常な世界であることを人類は、国際障害者年」に確認した。いのちの奉仕者として立てられた医師が、いのちの神聖さも不可侵性も弁えていないと言っこの矛盾が、今日の厚生省、医学部、医師会に対する国民の不満と不信感をかもし出す病根となっではないだろうか。

これはあなたへ



考えて下さい。

全ての意味において、

胎児は人間そのものです。

ごく最近まで、医者は胎児を「子宮の子ども」と呼んでいました。今、胎児は「細胞の群れ」、「妊娠の産物」あるいは「組織のかたまり」などと呼ばれています。

当然、私達にはこれらの真偽を見分ける勇気と常識とを持っています。胎児は人間なのです。中絶は心理学的な問題です。なぜなら、私達は皆、心の奥底で

中絶が人間の生命を扱っていることに気づいているからなのです。

ほとんどの人は、人類の最も罪深い行為は殺人と子どもの虐待であると思っています。しかし、多くの人は、無防備な子どもが殺されても別の見方をしています。中絶は慈悲的な行為ではないのです。誇張無しに、中絶は手足をもぎ取る、あるいは皮膚や肺を焼くような拷問なのです。そして、胎児も痛みを感じているのです。

あまりにも長い間、多くの人達が何を信じるべきなのか他人に教わってきました。そろそろ私達一人一人が自立し、他の人達に何が真実であるのかを伝える時なのではないでしょうか。

ノボトリー・シエリー

基本的事実



中絶とは必要で許可されるべきである、と世界中のほとんどの人がすでに決めてしまっている。子宮の中の子どもは、仲間の人間の一人として見られない。しかしもちろんあからさまに、胎児の殺人を許す訳にもいかない。誰も、「胎児殺しを合法化しよう」などと看板を掲げたりしない。つまり胎児の実在性は、否定されているのだ。アメリカ

力で奴隷制が合法だった時、黒人達の実在性と人間的尊厳が否定されていたのと同じ様に。胎児の実在性は、「細胞の塊」や「それは女性の権利だ」や「中絶はプライベートな事だ」といった言葉で隠されてしまっている。人々が胎児をまっすぐ見る様になれば、世の中は再び正常になるだろう！

中絶とは必要で許可されるべきである、と世界中のほとんどの人がすでに決めてしまっている。子宮の中の子どもは、仲間の人間の一人として見られない。しかしもちろんあからさまに、胎児の殺人を許す訳にもいかない。誰も、「胎児殺しを合法化しよう」などと看板を掲げたりしない。つまり胎児の実在性は、否定されているのだ。アメリカ

世間は見て

見ぬふりをしてる

1「みせかけはやめて下さい。

呼吸するたびに神が授けてくださった命を再確認し、心臓が鼓動を打つたびに母の子宮で始まった創造を続けているのです。そしてさまざまな動作をするたびに、受精の時に神の姿に似せて創られた人間という奇跡の人生を生き続けているのです。

私達は、この世の何百万もの胎児を殺すことを神がお認めになつているかのようにふるまってははいけません。というのは、すでに私達は神から、自分自身や他人に対して神の無限の愛を与えられているからなのです。どの子どもみな神から授かったものなのです（詩篇一二七）。私達はこの大切な授かりものを守る義務があるのです。

2「赤ん坊を守りなさい。

どの子ども守りなさい。子どもの中のものをぞいてごらんください。そして誰もおまえを愛さないだろう。おまえは世の中の何の役にも立たないだろうと言つてごらんください。

あなたが言っていることをその子がたとえわからなくても、おまえは死ななければならぬと言つてごらんください。

何と恐ろしい考えでしょう。しかし実際、このことは赤ん坊が世界中のあちこちで中絶されるたびに何百万回も繰り返されてきたことなのです。法律で認められている暴力なのです。

神が詩篇一二七で子ども達を「主の贈り物」と呼び、胎児を「報いの賜物」と呼んだ時、神は子ども達の尊厳と価値をはっきりと断言されたのです。神は子ども達は私達の未来だと言つておられます。大事にしなければならぬありがたいものだ。そして護らなければならぬものと。

社会は子ども達のことを考えずに、お金や自分のことのみを考えて、あわただしく過して子ども達を見捨てるかもしれません。でも、私達はそうすることできません。神の下僕として、私達は汚れない胎児を護り、子ども達の命の尊厳を守らなければならぬのです。

中絶に代わる方法を勧めた

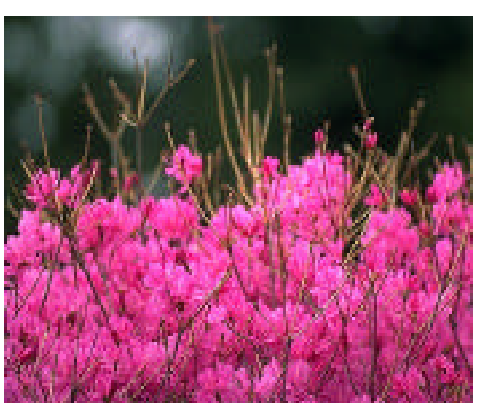
「1ページから」

外面的に役にたたないもの、不備なものはどんどん捨て去っていくというナチス的な経済合理性がついに人命という領域に侵入してきたという恐ろしいことなのです。日本の司教団はこのことを憂い、近日中に声明をだす準備をしています。多くの人たちが私たち自身と将来のすべての人間の生命に関する重大な問題として関心をもち、考え、祈りながら抗議の運動に参加して欲しいのです。

り、法律の改正や、大衆のデモ行進や、祈りなどを通して、私達は行動を起こしていかなければなりません。

あなたや、家族や、教会が神の子ども達を救う手助けとなる方法はいくつもあります。今日から、始めましょう。

ノボトリー・シエリー



Print For Life4/97

個人個人の価値

『神の子が受肉することによって、ある意味で自らをすべての人間と一致させた。』この救いの出来事は、「そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された」(ヨハネ3:16) 神の限り

ない愛だけでなく、さらには、すべての人格には比類のない価値があることを人類に啓示します。』(いのちの福音 No2)

我々の文化の中では、人間と生命の創造者「神」との関係が論点となり、そして多くの場合にその関係が否定的に扱われていることがますます明らかになっています。「選択」という言葉が、人間が生まれ持っている価値、全ての人間の中に神が存在するという真実のもとに成り立つ価値を人間から奪い取ってしまい

ました。人間に対する神の愛は変わっていません。ですからこそ、その愛についてゆっくり考え、他の人達にそれを理解させるよう努めるべき時なのではないでしょうか。

あなたの生命が始まった瞬間を思い浮かべてみて下さい。あなたが受胎された瞬間です。針の頭ほどの大きさもなかった時です。今のあなたとは全く異なる外見をしていました。でも神にとつては同じだったのです！神はその時のあなたを知っています。そして今のあなたも知っています。変わったところと言えば、外見と大きさと成熟に伴って変わったいくつかの部分ぐらいなものです。

次に、あなたがこのラプストリーを、自分達が「選択」派

であると思いついて入っている人達に伝えることが出来るということを想像してみてください。新しい生命の終結、あるいは終わりの間近な生命の意図的な終結、あるいは何らかの原因で普通ではなかった生命の終結に関する「選択」。あなたはこのような人達

に、子どものような純真さをもって、彼らが深く理解している「選択」という言葉の本当の意味に気付かせることが出来ると思いませんか？

今日、我々の文化では、純真な人間に対して行われている残酷な行為は、人を欺く言語で覆い隠されています。私達が「中絶など」という言葉は二度と使わないで下さい。その言葉は子宮の中で生きている赤ん坊を非人間化するものです。」と言うと、人々は全く驚いた顔で私達を見つめ返します。また、「避妊具は使わないで下さい。あなた達は、自分の体の中でその化学物質や道具が赤ちゃんにどうい影響を及ぼしているのか分かっていないので

す。」などと私達が言うと、人々は私達をあざ笑います。さらに、「誰にも死ぬ権利などはありません。あなたに自由意思があると

言うても、苦しんでいる他の人を殺す権利や、他の人にあなたの命を奪うように頼む権利を持つていてるわけではないのです。生命という贈り物は全くもってそのようなものではないのです。」などとと言うと、人々は余計なお世話だと言って怒り出します。

お分かりですか？だからこそ自分の命が始まった瞬間を想像してみることがとても大切なのです。神はあなたをとて愛しています。今もあなたを愛している。そして、あなたの知らないある子どもが、薬品や器具

や装置でその命を絶たれようとしている時、その子も人類の一員であることを思い出して下さい。このような生命軽視の問題を変えていくのは、問題が大きすぎてとて手に負えないと合理的に考えようとした時、こう考え直して見て下さい。もしあなたが声を挙げて立ち上がり、あるいはどこかの編集社に投稿し、あるいは週に一時間の時間をとり施設に行くことによって、一人の子どもの命を救えるということを想像してみてください。あなたが取る行動によって変えることが出来るのです。

比類なき人間個人個人の価値は事実であつて、意見ではないのです。

『いのちの福音』に生きる

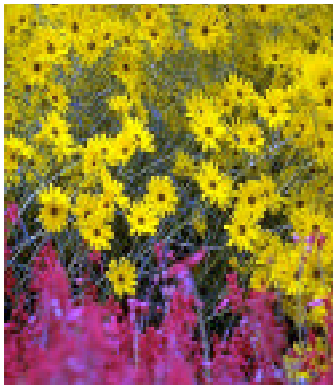
「自由が伝統と権威のあらゆる形態から脱しようとして、個人生活と社会生活の基礎である客観的で普遍的な真理のもっとも明白な根拠さえも締め出すとき、人間にとって善悪に関する真実は、もはや、自分が行う選択の唯一、確かな判断材料ではなくなり、主観的で変わりやすい意見、あるいは自分の利得と気まぐれに左右されるだけということになります。」

この『いのちの福音』の第19節からの引用句は、私達が今日直面している困難な問題を完全に描写しています。最近、法王ヨハネ・パウロ2世は生物学者、道徳主義者、法学者達に話をしました。法王は、全ての無垢な人間を受精の瞬間から完全に守り抜くことについて次のように語りました。「個人の精神的特質と個人の運命の超越的な天性と同様に、個人の現実性と真実を、知性ある自由な人間として尊重する民法を確立させるため、全ての人が勇気と明晰をもって最大限の努力をしてくれることを私は確信しています」と。

人間に関する客観的事実はまったくもって単純です。「人間の生命は神から来るもので、神からの贈り物である。それゆえ、神がこの生命の唯一の源なのであって、人間はその生命に手出しをしてはいけないのである。」

本当の自由とは、生命がいつでも迎え入れられ、愛されるという絶対的な真実に基づいています。そして、この自由を目指すことは価値あることなのです。しかしながら、誤った考え方の自由は、我々を死と破滅の地獄へと深く深く導くだけなのです。

社会は神の規律のもと、誤った考え方の自由ではなく、真実を尊重しなくてはならないのです。



『それはまだ赤ちゃんにもなっていないなかった』

私はうるたえました。私が妊娠していることを確認した病院の看護婦に、中絶医の電話番号を教えられたのです。

私は二人の子どもの子育てに奮闘している離婚女性でした。そのことが私に中絶を決意させた第一の要因だったのです。その上、結婚していないのにセックスをしていることを全ての人に知られるさまり悪さに耐えられなかったのです。中絶の是非については全く考えませんでした。中絶は合法的なことでしたし、私の問題の正しい解決策だと思ったのです。しかし、悪事に対して悪事で解決しようとしてもうまくいかないのです。中絶は私の心をずたずたにしたのでした。

とうとう予約していた日が来ました。私は病院へ行くためにタクシーを拾いました。運転手に病院の住所を告げ、私が行こうとしているのがどんな病院なのか彼が知らないことを願いました。「もし中絶をするつもりなのかと聞かれたら、死んでしまおう。」と思いました。彼が尋ねなかったので私はほっとしました。

病院に着いて、その建物に他にもオフィスがあるのを知って驚きました。その病院は建物の四階と五階を占めていました。病院が他の会社に囲まれているという事実は、おそらくその病院に入っている

く女性達に目立ちにくいと感じさせていたのでしよう。

エレベーターを降りると、正面に病院のドアが見えました。私はドアのノブに手を伸ばし、深呼吸をしてドアを開けました。それは丁度普通の病院に入っていくのと同じでした。私が歩いていくと、いくつもの目が私に向けられました。受付の人が隅の机のところに着座していました。私は名前を言って予約をしていることを告げました。彼女はリストを調べて私の名前にチェックし、費用を請求しました。支払いを済ませると、読んで記入するように何枚かの書類を渡されました。

私は、合併症が起きた時に彼らの責任を回避するための免責の書類にサインをしたことを漠然と覚えています。その合併症については、ほとんど起こらないと私は思っていました。

私が入った部屋はとても小さいもので、そこには他に三、四人女性がいました。やがて女性が入ってきて私達に向かつて話をしました。私は彼女が言ったことを覚えていません。まるで魂が身体から抜け出て夢の中にもいるように、物事が起こるのを見ているような感じだったのでした。

私はこの妊娠が初めの二人の子どもの時とどのくらい違っているのか考えてみました。あの子達の

時にはとても嬉しかったのに今度の子は恥ずかしさと恐ろしさで、私が楽しみにし大事にしなければならぬ生命だとは考えずに、むしろ私を困らせ当惑させるものだと思ったのです。どうして、私はこんなにも急変することができたのでしょうか。

とうとう私の名前が呼ばれました。看護婦がドアのところまで私を迎え、「すぐに済みますよ」と私を安心させるように言いながら、廊下を私に付き添って行きました。「生理解と同じぐらいの痛みしか感じませんよ。」と彼女は言いました。

私は服を脱いで、手術台の上に上がりました。私の身体から私の人間としての尊厳がどっと流れ出していくのを感じました。

医者が頭から爪先まで全身白くくめで入ってきました。顔はマスクで隠れていました。医者の前で裸になって手術台の上で横になっていたの、私は恐怖心と羞恥心を隠すことができませんでした。彼は忙しくて私の顔を覗く暇はありませんでした。彼はこの処置がとても簡単だというようなことを何やらつぶやきました。

それから機械のブーンという音が聞こえました。私は手術台の上に横たわって、お腹の中のもの文字通り吸い出されていくのをじっと見ていました。管を通って

大きなビンの中へ流れこんでいく血液が見えました。目をそむけたいと思いつつも、ますます多くの血液がビンの中に流れこんでいくにつれて、私の目は釘づけにされていました。

私の心は混乱していました。「赤ん坊を見ることになるのかしら。」と思い、「神様。そうなりませんように。」と願いました。私は看護婦の手をとって、私の胸のところでした。しっかりと握りました。

ついに中絶は終わりました。看護婦は私が手術台から起き上がるのを手伝ってくれました。誰かがピンをタオルで覆いました。

医者が私に何か言っていました。「初期だったから、まだ赤ん坊にもなっていないかったよ。」と言ってから彼は部屋から出ていきました。

服を着始め、お腹に触れた時、虚しさがこみあげてきました。その後、麻痺した感覚が襲ってきました。

着替え終わると看護婦が私を別の部屋へ連れて行きました。そこには他の女性達が横になっていました。

私も横になりました。誰かがすすり泣いているのが聞こえました。私はジュースとクラッカーを与えられました。私は目を閉じました。心と身体はまだ別々の所にあるような感じがしました。「何か変わったわ。」と私は心の中で思いました。

現実に戻り始めたけれども麻痺したままではいられないことを願いました。私は自分が感じ始めているものに絶えられなかったのです。

私は周りの女性達を見ました。彼女達は大丈夫のようでした。でも部屋のどこからか小さくすすり泣いている声はまだ聞こえていました。

一時間経って、誰かに、起きて次の場所へ行くように言われました。この部屋にも三、四人の女性がいきました。

女性が一人入ってきて、避妊用のピルを一ヶ月分私達一人一人に渡しました。彼女は私達に、かかりつけの医者のところへ行つて、処方箋をもらって、ピルを服用し続けるように指示しました。それから、彼女は私達に帰っていいと言いましたが、何度か中絶をした経験がある人はもう少し残るようにと言いました。

私はそこを出ようと起き上がりましたが、でも、他の人達はまだ残っていました。

何だか私は日が照りそそぐ青い空の下へ歩きだしたのを覚えていような気がします。一瞬、まるで重荷が取り除かれたような自由な気分を味わいました。まるで天まで飛んでいく鳥のような気分でした。私が自由と引き換えに支払わなければならない代償のことに少しも気づいていなかったのです。帰宅途中は耐えられませんでした。その時は、身体のものすごい痛みが心の痛みを上回っていました。私は死ぬのではないかと思うほどでした。何年か経って、私は死んでいればよかったと思えました。というのは、取り除かれ、置き去りにされた重荷とは、私の人間性だったから

なのです。

妊娠から開放されて私の生活は普通に戻るだろうと思いました。「結局、中絶なんて大した問題ではないわ。毎日四千も中絶が行なわれていて、中絶は個人的な問題なので、誰も私が中絶をしたと知る必要などないのだから。」と私は思いました。私の身体は永久に子どもから解放されたけれども、一方私の心は薄らぐことのない想いに捉われていました。

「自分の生活を続けなさい。することや行く所がたくさんあるでしょう。中絶のことは忘れてしまいなさい。もうあれこれ考えるのはよくなさい。あなたを頼りにしている二人の子どもがいるでしょう。」と私は自分に言い聞かせようとしました。「あなたを頼りにしている子どもがもう一人いたでしょう。あなたの中で中には彼はもういないけれど、あなたの心は決して彼を忘れはしないでしよう。」と私の良心の声が答えました。心の中では、彼の血でいっぱいになったあのピンがまだ見えていました。

私の心は休息も、慰めも、安らぎも何も見つけることはできませんでした。神様は、子どもを育て愛するという本能を持たせて、女性を創ったのです。女性がこの母性本能に背けば、心の奥底から抑えようのない深い絶望の悲しみが沸き上がりま

す。私は必死で私の心のなかの悲しみに気づかないふりをしようと思

は毎日少しずつ死んでいくのです。

私は、誰にも言わず心の内に悲しみを押し込めていました。12年間もの長い間誰も私が中絶したことを知りませんでした。教会に通い始めても誰かに話す気にはなりませんでした。人々とともに親しくなることはできませんでした。でも、彼らに私が隠している秘密を知られ、彼らに非難され拒絶されるのが恐かったのです。私は本当の自分を偽っていたのです。にもかかわらず、神に対して偽

ることはできませんでした。神は私の内なる悲しみの声を聞いていたのです。神は、私が苦しみのあまりに一週間に三、四回墓地へ足を運んでいることを知っていました。そこはとも安らかなところでした。ときどき、朝早く通勤途中に行ってみたり、散策したり、花の飾りを直したり、私の赤ちゃんはどうなったのだろうかとあれこれ思い巡らしたりしながら午後のひとときを過ごしたものでした。私は知らない人のお墓に花を植えました。私には子どもの死を悲しむ必要があつて、そんなことをしているのだと私は気づかなかつたのです。中絶は死です。しかし、社会は中絶を死だとは認めていません。普通、家族を失うと、身内や友人に慰められます。追悼の式があり、花を手向ける墓があります。中絶には何もありません。しかし、悲しみは全く同じなのです。失くした気持ちも、虚しさも同じなのです。

墓地へ行くたびに自殺を考えるようになりまし

よ、眠っている間に私を死なせてください。もう一日も長く生きることが耐えられませんか。」と。そして目がさめると、「神様、あなたは私の祈りに答えてくださらなかった。どうやってもう一日過ごしたらいいのですか。」と、声を上げて泣いたものでした。

「わかりました。あなたが何もしてくださらないのなら、自分でします。」と、神に告げ、死を企てました。日曜の夜のお祈りのあと、私は牧師の机の上に遺書を残しました。その手紙には私が誰にも打ち明けることのできなかつた全ての悲しみや苦しみを書きました。私には今すぐ助けが要ることがわかつたのです。

翌日、牧師は手紙を読み、教会に通っているキリスト教徒の精神科医にすぐに電話をしました。その医者が私をすぐに入院させるよう牧師に言ったのです。その夜、私は病院にいました。私には自殺願望があり、ひどいうつ病だと診断されました。私が墓地へ行つたり自殺を考えるようになると、私は神に祈り続けていました。神のこともつと心の底から知りたかつたのでした。でも、まだ告白していないこの中絶の罪は私の心の中に埋もれたままでした。神の目は私の臍んだ傷を見て、私を癒そうとされましたが、私が協力しなければならなかつたのです。

今病院にいて、12年間の悲しみが私の心の奥深いところから噴き出したのです。その苦しい体験は言葉では言い表わせないほどつらいものでした。しかし、神が、私を導いてそ

れを切り抜けさせて下さつたのです。ようやく涙は止まり、重荷を降りることができたのです。

神の許しを拒まなければならぬほど、私が中絶したことが神の心を傷つけるものではなかつたということがひとたびわかると、私は神の許しを受け入れ易くなりました。私は自分を罰することをやめました。神の許しはいつもそこにあつたのです。私はやつと心を開き、神の許しを受け入れました。

私がしなければならぬ最初のことは私の中絶のことを子どもたちに告げることでした。彼らに話すのは本当に不安でした。私は勇気と適切な言葉を下さいと神に祈りました。ある日曜日の午後子どもを集めて、天国に彼らの兄弟が姉妹がいることを話しました。彼らにはショックなことだつたけれども、彼らに打ち明けたことで、彼らはきつと安心したと思います。子ども達は私が長い間悩み事を抱えていることをずっと知っていましたから。彼らは私が精神的な理由で病院に入っていることを知っていました。その原因は知りませんでした。

その原因がわかつたので、彼らは面と向かつては私にあまり話しませんでした。彼らがお互いになんか話を話したのだらうかとしばしば思いをめぐらしました。私に対して、私がしたことのせいで、子ども達が私を軽蔑することはありませんでした。彼らの愛情が減ることはなかつたのです。失くした子どもを嘆き悲しむことが、彼らに対する私の愛情を疑わせることにはなら

なかつたのです。むしろ私達の愛情はより強くなったのです。彼らは私が中絶反対運動をするのを支えてくれています。一番下の息子が、「僕でなくてよかつた。」と言いました。私もよかつたと答えました。彼はあの中絶のわずか二ヶ月後に妊娠したのですから。

私は自分の子を愛され救われるようにキリストに捧げました。そして私自身もキリストに捧げたのです。いつか赤ん坊と共に、神に優しく抱かれる時が来るでしょう。

キリストは私の悲しみを取り去り、喜びを与えてくださいました。彼は私の涙でかすんだ目を見えるようにして下さり、罪と悲しみと許されざる気持ちを私の心から洗い流して下さいました。キリストがどれほど深く私を愛してくれているのかを知り、キリストの愛をすべての人と享受しなければならぬことを知りました。

ポレット・ホーキンス

主よ、御耳を傾け、私をあわれみ、

私の助けとなられよ。

あなたはわたしの喪を踊りにかえ、

私の袋を解いて、喜びをま

わされた。

そのため、私の心はあなたを賛美してやまない、

主よ、神よ、とこしえに主をたたえよう。

母であることの何がそんなに

素晴らしいことなのではないか

ともかく、母であることの何がそんなに素晴らしいのでしょうか。私にとって、母であることは一体何の利益になるのでしょうか。誰も幸せそうにみえない時、こんな質問を自分にしてみるのです。

母としての私の仕事は子ども達が天国へ行くように準備してやることであることはわかっています。しかし、私の魂が天国へ行くように子ども達の方が手助けしてくれていることに私は気が付きました。

立派な人間になっているのです。母として、出産し、眠れない夜を過ごし、病気の我が子を看病し、自分が病気の時も我が子の世話をするなどの経験をjして、以前の私にはなかった精神の強さを身につけました。

親の目から子ども達を見ると、彼らに失望したり、誇りに思ったり、大好きになったりする時があることがわかります。躰が必要な時や、優しく導いてやる必要がある時、教訓を学ばせるためにあえて間違いをさせなければならぬ時などがあります。このことは、たとえば、私を守り、私を愛し、私を導き、私を神様が望むような人間に育てている神様の御業と非常に似ているに違いありません。子ども達のおかげで、私はゆっくりと、より

りして、助けてあげる機会が持てます。母として、他の母親に会って、子ども達と一緒に家であることから得るものや、神様を信じることの大切などを、証言する機会が持てます。

母として、私は立ち止まって、注意して見て、神様がお創りになった素朴な喜びや万物に感謝をしなければならないことを、絶えず子ども達から気付かされます。母として、私は子どもの失望を何か良いものに変えてやろうという気にさせられます。私に前向きな考え方ができるようになってきているのです。母として、子ども達によって引き起こされた、とても多くの面白い場面を経験しています。したがって、私にユーモアのセンスが身につきました。母として、私は他の母親がづらい思いをしていたり、ひどい目にあっていたりする時がわかります。それで、励ましの言葉をかけてあげたり、手を貸してあげたり、食べ物に分かち合った

赤ちゃんがお腹をすかせて私の胸に口をすりよせてくる姿を見たこと、初めて歩いた時のこと、初めて言葉を発した時のこと、私の首に巻き付けられた小さな腕、すべてのことを大切な思い出として胸にしまっています。母として、口を慎むことや、かんしゃくを起こさないことや、笑っていい時や真面目でなければいけない時を知ることなど、自制できるようになっています。母として、私はわがままにならないようにすることができるとても難しい時があります。他の人が必要としていることが自分のより急を要していて強いことがわかれば、自分自身のことより他の人のことを優先しています。

母として、子ども達がたとえどんなことをしようとも彼らを愛し、主がなさるように我が子を見るとき、無条件の愛と呼ばれるすばらしいものに取り組みむことができます。母として、私は忍耐力が身につきました。最初は大事な我が子をこの手に抱くまでの九ヶ月間我慢し、その後ずっと、赤ん坊の止むことのない要求に耐え、三才の時の「なぜ」という問いかけに耐え、「自分でできるから」という言葉に耐えているのです。母となつて、神様に対する信

仰が本当に増大しました。日々神様への信仰心が深まり、我が子が神の子でもあることを知って、私の妊娠期間をしつかり管理し、母としての私の関心事のすべてを神に捧げることができています。母として、私は謙虚になりました。子ども達が人間を謙虚にさせるのです。母としてのこの短い何年かを振り返ってみると、私は自分がどれだけ成長したかがわかります。私はこのことを生涯の学習にしたいと思います。母であることが私に一番よい人間としての成長と学習の機会を与えてくれているのです。

日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

「中絶に反対する運動」

〒780 高知市新本町一丁目7-31

電話/Fax 0888-73-3619 e-mail: nvt56n@ps.inforiyoma.or.jp

会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円

一万円 五千元 一千元

無料: 毎月プロ・ライフ・ニュースター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さい命を大切に育みましょう。

事務所時間:

月一金 12:00-17:00
日のみ 10:00-13:00
土曜日 休み

御送金

銀行: 四国銀行朝倉支店
口座番号: 0573553
日本プロ・ライフ・ムーブメント

郵便局: 「郵便振替」
現在口座番号: 01660-5-39607
日本プロ・ライフ・ムーブメント

事務所便り

お母さん、お母ちゃん、かあさん、かあちゃん、おふくろ。呼び方が違ってても、人はこのように呼びかける時、なぜか、落ち着いた気持ちになれる。そして、母もまた、そう呼ばれる時、なぜか、両手を広げて、我が子を迎え入れたい気持ちになる。

一人の人間が母の胎内に生を受けた時から十ヶ月もの長い間、命の綱、へその緒につながれて共に生きる母と子の絆。

「世の中で一番きれいなのは女性。女性の中で一番きれいな心をもっているのはお母さん。そのお母さんの中で一番きれいな心をもっているのはマリア様の心」とある神父様が話してくれたことがあった。

女性は母親になった時、神様の優しい心を授かる。一人一人の母親が我が子に向ける優しさは誰にも負けないほどのもの。それは、どんな時にも我が子を受け入れる性格として、父親よりも強い心を持っている。

事務所が発行した「赤ちゃん・最初の十ヶ月の旅」は、その写真からも、文章からも、母子の強い結びつきを理解することが出来る。この本を通して、日本プロ・ライフの事務所は母と子の両方の幸せを願っている。中絶で子どもをなくせば、決して、母親は幸せになれない。どちらか一方だけ幸せになることが出来ないほどその絆は強いものだから。

宿った時を分らない母親も、胎動を感じるようになり、やがて月満ちてこの世に生まれた子どもから、「お母さん」と呼びかけられる時は、母親の至福の時。そして母の日の何よりも最高のプレゼント。あなたがいてくれて、今日の私がいる！その事に感謝して、すべてのお母さんへ、「お母さん、ありがとう」

日本プロ・ライフ・ムーブメント

無制限の自由は無秩序

不妊手術を行うのは「神のお望みに反して自らの子宮を閉じてしまうもの」とする考えは全く正しいものです。そもそもセックスというのは、神が造られた我々の身体を自然のままに敬い、崇めることです。人工的な避妊と意図的な不妊手術は、その自然を敬わないばかりか、自らの身体を完全にコントロールしようとする不遜な企てでさえあります。それはつまり、神の造られた身体に何か故障があると断定し、薬やメスを用いてそれを直そうとしていることになるのです。

責任あるセックスの美しさは、自己抑制をすることにあります。今この時点で子どもを持つことができないなら、私達はその現実に対して責任を持ち、行動を抑制するべきなのです。配偶者に対する完全な愛情は、責任あるセックスによっていつでも与えることができます。人工的な手段では決して与えることができません。なぜなら、配偶者同士でお互いを隠し、神からも隠れようとするからです。不妊手術が人工中絶よりも望ましいかという質問は、それ自体が間違っています。なぜならそれは、将来起こりうる悪への唯一の解決法として、もう一

つの悪を正当化しようとしているからです。例えば、子どもが将来虐待を受けるかも知れないという理由があれば、人工中絶を正当化することはできないでしょうか？そしてそれを受け入れれば、ティーンエイジャーの自殺を、鬱病や将来の失敗を回避するための解決方法として弁護することになるのではありませんか？この経過がわかりになりますか？要するに、将来起こるかも知れない悪事を防ぐために、今悪事を働くことになるのです。

いったん悪を行うことを受け入れてしまつと、どんな悪をも正当化する理論的根拠を作り出すことができるようになります。安全装置ははずれてしまします。ただし、その根拠とは大変間違つたものです。火が危ないからといって、子どもに手を出さないようにさせるのは酷なことでしょうか？手をやけどすることがないように、あらかじめ子どもの手を切り落としてしまつたことを我々はするでしょうか？我々は、正義を自分達の中に刻みつけ、それによって行動しなければなりません。また、正義を積極的に他の人々に広め、事態を收拾すべきです。制限のない自由は、無秩序を招くのですから。